

### RUBeC 演習を終えて

宮元 健太

KENTA MIYAMOTO

環境ソリューション工学専攻修士課程 1年

私は、学内のプログラムである RUBeC 演習でアメリカのカリフォルニア州を訪れた。約2週間という短い期間であったが、様々な経験を得ることができた。

RUBeC 演習とは、今後のグローバル社会で活躍することができるようなスキルを得るためのプログラムである。英語のスピーキングスキル、リスニングスキルを養うためのプログラム、海外の企業を訪問するプログラム、海外の大学を訪問するプログラムなど多くのプログラムで構成されていた。

約2週間のアメリカでの生活を支えて頂いたのは、ホストファミリーである。食事の準備、洗濯などの助けをして頂いた。さらに私たちへ分かりやすい、聞き取りやすい英会話をしてくれた。朝早くから朝食を作っていたいただいたこと、つたない英会話でも興味を持って聞いてくれようとしたことは、本当に感謝している。

この RUBeC 演習では、英語のスキルアップのためにカリフォルニア州バークレーにある浄土真宗センターへ通った。研究発表の際に用いる要旨を書くためのスキルを午前、午後にはプレゼンテーションのスキルを磨くための授業に参加していた。教えてくださった先生方はみなアメリカ出身の方ということで、日本の英語教育とはまるで異なった授業であった。第一に異なっていた点は、学生側の受け身の授業ではない点である。日本では、先生が教壇に立ち、黒板を用いて、先生主導で授業が行われる。そのため、学生は受け身の体勢となりがちであり、静かな授業を好む先生が多いような気がする。しかし、アメリカの先生は静かな授業を好まなかった。学生側が自発的に授業に参加することが第一であると考えていた。そのため、授業に活気が生まれ、楽しく授業が進行していたように感じた。私自身も授

業を重ねるごとに積極的に英語で伝えようとする姿勢をとるようになった。

第二に先生方がとてもフランクなことが挙げられる。生徒の反応に大きなりアクションをとり、授業を盛り上げてくれた。

最終日には自身の研究に対するプレゼンテーションを行った。英語独自の発音の強弱、チャンクリーディングと呼ばれる英文の区切りをつけた話法を駆使して最終日に臨んだ。初日のプレゼンテーションとはまるで異なっていたことを自身でも実感することができた。ネイティブの英語を肌で触れることで自身の成長を感じ取れたことがとてもうれしかった。

RUBeC 演習では企業訪問をする機会もあった。私自身、これまで海外の国の企業を訪問したことがなかったので良い刺激となることを期待していた。今プログラムで訪問した企業は Thermal Technology という高度な熱加工技術を持つ企業であった。日本で言う中小企業の位置付けであったが、企業独自の技術を持つ。特に Thermal Technology 社が開発した放電プラズマ焼結炉は最高温度 2400℃ に達する焼結炉であり、1分あたり 100℃ 上昇する温度上昇スピードを持つ。さらに高温冷却にも優れている。この熱技術は世界でも類を見ないという話であった。

私は環境ソリューション工学科を専攻しており、大気関係の研究をしているため、事業内容にあまり興味を持つことができなかった。しかし、その場で働く社会人としてのアメリカ人に新鮮味を感じた。

これまで日本でインターンシップ、企業訪問などで日本の企業に触れたことがあった。しかし、工場や商品開発の場でラフな私服を着用しての仕事は見たことがなかった。Thermal Technology 社の社員はとてもラフな格好、雰囲気の仕事がしやすい環境にあると感じた。特に日本の多くの企業で感じた「硬さ」が無かったことが印象的であった。「硬さ」から生じる息苦しさがないということで、新たな発想が生じやすい環境であるのではないかと感じた。

この企業訪問では日本の企業と海外の国の企業の違い、共通点を実際に目にすることができた。さらに世界の技術を知ることができ、ある意味、世界の大きさを実感することができ、良い経験となった。

大学交流としてカリフォルニア州デービス市にあるカリフォルニア大学デービス校も訪れることができた。このデービス校には工学部、農学部、理学部、文学部、経済学部があるということであった。世界でも屈指の研究施設を誇るカリフォルニア大学ということで、そのレベルの高さを肌で感じることを楽しみにしていた。

デービス校の敷地面積はとて大きく、ほとんどの学生が自転車で学内を移動していた。そのため、学内に道が舗装されており、交通信号まで設置されていた。勉強スペース、休憩スペース、カフェ、飲食店などの学内施設が充実しており、学生にとって素晴らしい環境であると感じた。

研究室訪問では、地震を再現することが可能な巨大遠心分離機を拝見することができた(図1)。この巨大遠心分離機は日本の化学分野で扱う遠心分離機と原理が同じであるが、大きさ、用途が全く異なるものであった。半径9mの大きさであり、地面の深さを実験的に再現可能なため、遠心分離機を用いるということであった。この巨大遠心分離機は、地震の再現をはじめ、津波の動きも再現可能であり、多くの実験に適用されていた。主にセメントを使った地震被害削減の研究や液状化の研究、土木の研究などで活躍しているということであった。

研究室で研究している学生たちは、とても意欲的であり、学生間でのコミュニケーションをとりながら研究を行っていた。

この大学訪問では研究者としての姿勢を学ぶことができた。次にこのデービス校へは研究者として帰



図1 巨大遠心分離機

ってきたいと感じた。

この RUBeC 演習を終えて、日々のすべてが新鮮で、刺激的であったように思う。大切なことは相手に伝えないのではなくて、伝えようとするところである。これはこの2週間アメリカに滞在して感じ取ったことである。つたない英会話でも体を使って、または、知っている単語で試行錯誤する。このことの繰り返しが大切である。この RUBeC 演習で得た経験は必ず将来に生きるであろう。現在の社会はすでにグローバルなものである。ビジネスの場でこの経験が生きることはもちろん、異国の文化、考えを肌で感じ取る際にも生きてくる。現在、私は海外の国で働くことに関心はまだない。しかし、この先、日本で職に就いたとしても、海外の国との交流なしにビジネスは成り立たない社会となっているだろう。海外の国の考え方、文化を今一度知る、見るのが大事である。それによって、自身にとって良い刺激となることはこのプログラムでも明らかとなった。再び海外の国には足を運びたいと感じたし、目で実際に見るということ、肌で実際に触れて感じるということを大切にしたいと感じた。